

〔訳註13〕一八四二〜一九〇八。アラブの反乱を指導し、最後にはナチ・ドイツへ逃げ込んだエルサレムの大ムフタイで最高ムスリム評議会議長のアミン・フサイニーの父。フサイニー家はオスマン帝国時代から英国信託統治終焉までの二五〇年間、エルサレムを中心にパレスチナで強い影響力を發揮した名家で、民族主義運動を指導した。

### 第三章 シオニズムはユダヤ教である

シオニズムはユダヤ教と同じであるという主張を正確に検討するためには、シオニズムが生まれた歴史的文脈の検討から始めなければならない。十九世紀中葉に形成されたシオニズムは、ユダヤ人文化の中ではさして重要ではない一つの憧憬にすぎなかった。それは中東欧ユダヤ人社会の中で見られた二つの感情から生まれた。一つは、ユダヤ人を平等な人間として仲間扱いすることを拒否する社会、時には法的に迫害したり、経済危機や政変で窮した政府が一般民衆の不満のはけ口としてユダヤ人迫害を奨励し、暴徒の襲撃を見て見ぬふりをする社会の中で、安全を希求する感情。もう一つは、当時の歴史家が「ヨーロッパ諸国民の春」と呼んだ民族運動の高まりの影響で、ユダヤ民族の統合を希求する感情。しかし、ユダヤ教を宗教からネーション（民族または国家）へ変えようとした運動は決して稀有なものではなかった。崩壊しつつある二大帝国——オーストリア・ハンガリー帝国とオスマン帝国——の領内には、民族または国

家として自己実現することを望む宗教集団や民族集団は他にも多くいた。

現代シオニズムのルーツはすでに十八世紀のいわゆるユダヤ啓蒙主義（啓蒙主義）の中にその萌芽が見られた。著作家、詩人、ラビらの集団がヘブライ語を復活させ、伝統的・宗教的ユダヤ教育の枠を開放し、普遍的な科学、文学、哲学の研究を取り入れようとした文化運動である。ヘブライ語新聞や雑誌が中東欧で急増し、その中から、シオニズム史において「シオニズムの先駆者」と呼ばれる人物が出現した。彼らはヘブライ語復活と民族主義を結びつけ、強力な民族主義を打ち出した。民族主義は二つの形を取った。一つはユダヤ教を民族主義運動と再定義したこと。二つは、七〇年に古代ローマ軍のために追い出された故郷の約束の地へユダヤ民族を帰還させるために、パレスチナを植民地化する必要があるとしたこと。彼らは「帰還」を「農業入植」という形で表現した。（ヨーロッパの多くの地域ではユダヤ人は土地所有と耕作が許されなかった。それゆえ、自由民としてだけではなく、農業民族として再出発することに憧れていた。）  
こういう考え方は一八八一年のロシアにおけるボグロムの嵐の中で強くなった。この迫害がパレスチナへの憧憬感情を「シオンの愛好者」と呼ばれる運動が推進する政治的プログラムに変えたのである。シオンの愛好者たちが熱狂的な若いユダヤ人をパレスチナに入植させたのがシオニスト入植第一号であった。この第一期シオニズム運動はテオドル・ヘルツルの『ユダヤ人国家』刊行と政治的・外交的活動で頂点に達した。ヘルツルはオーストリア・ハンガリー

帝国のブダペストで生まれたが、生涯のほとんどをウィーンで過ごした。彼は近代ユダヤ人の居住地における立場に関心を持つ劇作家として活動を始め、初めのうちは居住社会への完全同化が問題解決への道だという意見だった。一八九〇年代にジャーナリストとなり、彼自身の説明によると、ジャーナリスト時代に反ユダヤ主義の根強さを思い知ったという。彼は同化による問題解決は不可能と判断し、ユダヤ人は自分の国を持たないから差別されるのだと考え、彼が「ユダヤ人問題」と呼んだものを解決するには、パレスチナにユダヤ人国を建設しなければならぬと主張するようになった。

この初期シオニズム思想がドイツや米国などの国のユダヤ人社会で知られ始めたとき、有力ラビや要人たちはそれに反対した。宗教指導者たちはシオニズムを一種の世俗化・近代化と見做し、世俗派ユダヤ人は、シオニズム思想のためにユダヤ人の居住国家への忠誠心に対する疑念が生まれ、そのため反ユダヤ主義を増幅させる恐れがあると心配した。宗教派も世俗派もヨーロッパのユダヤ人迫害に対し、シオニズムとは異なる対処をしてきた。ある人々は（ちょうどヨーロッパ近代化の波に直面したイスラム教原理主義者が同じことをやったように）ユダヤ教とユダヤ文化の伝統にいつそうしがみつくことを主張し、またある人々は居住国への同化努力を主張した。

一八四〇年代と一八八〇年代の間にヨーロッパと米国にシオニズム思想が入ってきたとき、

ユダヤ人の信仰生活は大まかに言つて二分してゐた。一方はユダヤ教への純化・原理主義化——つまり戒律を厳しく守り、民族主義などの新思想を避け、近代化をユダヤ教徒生活にとつて好ましくない脅威と見る生き方である。他方は、非ユダヤ人社会の生活との違いを最小限にするように世俗生活を取り入れる生活——つまり、ユダヤ教徒的生活様式を祝祭日の儀式、金曜日のシナゴークでの礼拝、贖罪の日の断食のときに人前で食事をしないこと程度にとどめておく生き方である。後者を主張したユダヤ人の一人であるゲルシヨム・シヨールム（一八九七—一九八二年）は自著『ベルリンからエルサレムへ——青春の思い出』（Berlin to Jerusalem）の中で次のような逸話を書いている。ヨーム・キップールにはいつもドイツのユダヤ人青年仲間とお決まりのレストランへ行つた。店主は「うちのレストランでは断食している紳士諸君用に特別室を用意しています」と言つて迎えた。個々のユダヤ人、個々のユダヤ人社会は、この厳格なユダヤ教正統派と世俗派の間に挟まれて暮らしてゐた。十九世紀後半シオニズムに対して一般ユダヤ人がどういふ態度であつたかを、もつと詳しく見てみよう。

ユダヤ人の世俗主義は、キリスト教世俗主義やイスラム教世俗主義と同じように、世俗主義としては少し風変わりである。前述した世俗的ユダヤ人はユダヤ教と切り離されているわけではなく、何らかの形でユダヤ教とつながる人々であつた（ちようど、英国の世俗的キリスト教徒が復活祭やクリスマスを祝い、子どもを英国教会の学校へやり、日曜日のミサに定期的またユダヤ人がどういふ態度であつたかを、もつと詳しく見てみよう。

は不定期に出席するのと同じである。この近代的で世俗化した信仰形態は、十九世紀後半に、改革派運動という大きな宗教運動となつた。それは時代錯誤の慣習や儀式に囚われず、宗教を近代生活に適応させるような信仰形態を求めた。特にドイツと米國で盛んであつた。改革派が初めてシオニズムと接触したとき、ユダヤ教を民族主義運動にしてパレスチナにユダヤ人国を作るといふ発想に、激しく反対した。しかし、一九四八年にイスラエル國が建設されてからは、彼らの反シオニズム姿勢が変化し始めた。二十世紀後半、米國では改革派の大多数が新改革派を結成し、それは米國で最も有力なユダヤ人団体の一つとなつた（もつとも、正式な形でそれがイスラエル國とシオニズムに忠誠を表明したのは一九九九年になつてからであつた）しかし、その新組織からまた多数のユダヤ人が抜け出て、別個にユダヤ教徒アメリカ評議会（American Council of Judaism, ACJ）を立ち上げた。このことは、一九九三年時点でも、ユダヤ人の間ではシオニズムがまだ少数派であることを世界に示すものであつた。ACJはシオニズムに対して旧改革派の考え方を踏襲した。

分裂するまでは、ドイツと米國の改革派運動はシオニズムに対して一致した強い反対姿勢を維持してゐた。ドイツの場合、改革派は「ユダヤ民族」といふ発想を公式に否定し、自らを「モーゼ信仰のドイツ人」（*Germans of the Mosaic faith*）と呼んだ。初期のドイツ改革派は祈禱儀式から「エレッツ・イスラエル」（イスラエルの地）やそこに國を作ることに言及をすべて排除し

た。同じように、一八六九年、米国の改革派は第一回大会で次のように述べた。

イスラエル「すなわちユダヤ民族」のメシア的目標は、地上の諸国民と再分離するなど、ダヴィデの子孫のもとでユダヤ人国を復元することではなく、神と結合する信仰告白のもとで神の子らを統一させ、そうすることですべての理性的生物の統一、すべての理性的生物の精神的純化という使命を実現することである。

一八八五年の改革派大会では、「我々は今もう自らを民族とは見做さず、宗教的コミュニティと見做す。パレスチナへの帰還（訳注4）やアローンの息子たちの下で自己犠牲的崇拜やユダヤ人国に関するいかなる法の復活も考慮しない」と宣言された。

この点で著名な指導者は米国のラビ、カウフマン・コーラーで、彼は「パレスチナのユダヤをユダヤ人の故郷にするという考え——それは世界のユダヤ人を『宿無しにする』（unhome）にする考えだ」として拒否した。十九世紀末の改革派指導者アイザック・メイアー・ワイズ（一八一九〜一九〇〇年）は、ヘルツルのようなシオニズム指導者を、科学者の仮面を被った鍊金術ベテレン師だとよく揶揄つたものだった。ヘルツルが住むウィーンでも、アドルフ・イエリネック（一八二二〜九三年）が、シオニズムはヨーロッパ・ユダヤ人の地位を危うくするので、ほ

とんどのヨーロッパ・ユダヤ人はシオニズムを拒否していると主張し、「我々にはヨーロッパが故郷だ」と宣言した。

改革派ユダヤ教徒の他に、当時の自由主義者ユダヤ人も、シオニズムが反ユダヤ主義に対する唯一の解決策だという考え方を拒否した。ウォルター・ラカー（訳注5）が自著『シオニズムの歴史』(The History of Zionism)の中で書いたように、自由主義ユダヤ人はシオニズムをヨーロッパのユダヤ人の問題に何の解決ももたらさないまやかしの運動と見做した。彼はむしろ自分たちが育つた故郷である国への全面的忠誠と、その国の国民として完全同化する意思を表明することによって、「ユダヤ民族の再生」をすべきだと主張した。彼らは、世の中がもつと民主主義化すればユダヤ人迫害や反ユダヤ主義の問題が解決されるだろうという希望を抱いていた。実際、英国や米国に移住したユダヤ人が自由主義によって救われていることを、歴史が示しているではないか。しかし、同じことがヨーロッパでも起きると信じた人々は、結局、裏切られた。それでも、現在でもその当時と同じように、シオニズムを正しい答えだと思わない自由主義ユダヤ人は多い。

一八九〇年代後半、ヘルツルの熱心な活動のおかげでシオニズムが以前よりも世界に認められる政治運動になったとき、ようやく社会主義者のユダヤ人と正統派ユダヤ教徒がシオニズム批判の声を上げ始めた。ヘルツルは当時の政治状況をよく理解していて、パレスチナに近代

ユダヤ人国家建設を支援すればヨーロッパの利益になると、新聞記事やユートピア物語や政治パンフレットを通じて宣伝した。しかし、それらが世界の指導者に大きな感銘を与えたわけではなく、パレスチナの支配者であるオスマン帝国もあまり関心を示さなかった。むしろヘルツルの業績は、一八九七年の第一回シオニスト会議をスイスのバーゼルで開催し、シオニズム活動家を結集させたことだった。その会議から二つの組織が生まれた——世界にシオニズム思想を広める世界機構と、パレスチナへのユダヤ人入植を推進する現地のシオニスト諸集団である。

このようにシオニズム思想の具体化に伴って、シオニズムに対するユダヤ人の異論も形をとっていった。改革派運動以外にも、左翼ユダヤ人、いろいろなユダヤ人コミュニティの一般指導者、正統派ユダヤ教徒などから反対意見が続出した。一八九七年、第一回シオニスト会議がバーゼルで開かれたのと同じ年、ロシアではユダヤ人の社会主義運動が生まれた。ブントである。ブントは政治運動であると同時にユダヤ人労働組合でもあった。ブントのメンバーたちは、社会主義革命、ボルシェビキ革命であつても、ヨーロッパ・ユダヤ人問題に関してシオニズムよりはるかに良い解決法だと信じた。彼らはシオニズムを一種の逃避主義と見做した。もつと重要なことは、ナチズムとファシズムがヨーロッパで台頭し始めたとき、シオニズムは居住国家に対するユダヤ人国民の忠誠心に疑惑を招き、この異常な反ユダヤ主義の発展に貢献することになると、ブントが批判したことだ。ホロコーストを経験した後でも、ブントは、ユダヤ人

は人権や市民権が尊重される社会に安住の地を求めるべきだと主張して、ユダヤ人国家建設を万能薬と考えなかった。しかし、一九五〇年代半ばから、強い反シオニズムの感情が次第にブントから消え始め、ついにはかつて強力だった社会主義運動の残党たちもイスラエル国支持を決定したのだった（イスラエルにブント支部が結成された）。

ブントのシオニズムに対する反応はヘルツルにとつて大した問題ではなかった。それより英国やフランスなどの国に住むユダヤ人の政治的又は経済的有力者の中途半端な反応に悩まされた。彼らはヘルツルを現実離れした思想を吹聴するペテン師か、あるいはもつと悪いことに、せつかくユダヤ人が英国などの社会で解放と統合という点で前進しているにもかかわらず、その社会におけるユダヤ人の生活を破壊する危険な人間と見た。世界の主権国家と同じような立場の他人の国にユダヤ人主権を築こうというヘルツルの呼びかけに、ビクトリア朝の英国ユダヤ人は当惑した。中央ヨーロッパや西ヨーロッパの社会に統合したユダヤ人コミュニティにとつて、シオニズムは、英国ユダヤ人、ドイツ・ユダヤ人、フランス・ユダヤ人のそれぞれの祖国に対する忠誠心に疑問を投げかけるような、挑発的思想であつた。第一世界大戦前には、彼らがヘルツルを支持しなかったために、シオニズムは強い運動にならなかつた。一九〇四年のヘルツル没の後になつて、他のシオニスト指導者——とりわけヘルツルが死んだ年に英国へ移住、そこで化学者として名を成し、第一次世界大戦で英国に戦争協力したハイム・ワイツマン

——たちが英国政府と強い同盟関係を築いた。後述するように、英国政府もシオニズム運動に協力した。

シオニズム初期時代におけるシオニズム批判の三番手はユダヤ教超正統派であった。今日でもシオニズムに反対する超正統派ユダヤ教徒は多くいる。もつとも十九世紀後半に比して超正統派の勢力はかなり小さくなり、彼らの一部はイスラエルへ移住してイスラエル政治の一部となってしまった。それでも彼らは、昔と同じように、非シオニズム的ユダヤ的生活の文化様式を維持している。ヨーロッパに初めてシオニズムが登場したとき、伝統的な多くのラビは信者をシオニスト活動家と関わることを禁じた。ラビたちは、シオニズムを、メシアの到来によってイスラエル再建がなされるまでユダヤ人を異郷生活に留めるといふ神の御意志を人為的に行おうとする冒瀆行為だと非難した。ラビたちは、「異郷生活」に終止符を打つため、に全力を尽くせという考えを全面的に否定した。イスラエル再建に関しては神の御言葉を待ち、その間伝統的なユダヤ教徒的生活を實踐しなければならぬと説いた。個人としてパレスチナへ巡礼して勉強することは許したが、それをパレスチナへの大量移住の許可と解釈してはならない、と戒めた。ハシデイズムのジコフ派（異教徒）の偉大なドイツ人ラビは、シオニズムは何世紀も前の伝統を持つユダヤ教の知恵と法をボロ布（国旗）、土くれ（国土）、歌（国歌）と入れ替えよと要求することだと述べ、パレスチナへの移住による人為的なイスラエル再建を痛烈に批判した。

しかし、有力なラビの全部が全部シオニズムに反対したわけではなかった。たとえば、ラビ・アルカライヤラビ・グートマツヘルやラビ・カリシエルのようなシオニズム事業を認めた著名な権威主義者の集団がいた。まったくの少数派であったが、今から考えると、彼らは現在のシオニズムの国家宗教派の土台を作ったという点で重大である。彼らの宗教的曲芸は実に見事であった。イスラエルの歴史では彼らは「宗教的シオニズムの父」と呼ばれている。宗教的シオニズムは現在イスラエルではたいへん重大な運動である。とりわけ、一九六七年戦争の勝利後に誕生した過激なメシア的入植者運動グツシユ・エムニーム（信者たちの集団、正統派）は、西岸地区やガザ回廊への入植を強行している。グツシユ・エムニームのラビたちはユダヤ人がヨーロッパを出るだけでなく、パレスチナへ入植して土地を開墾することは民族的（国家的）使命であるばかりか宗教的義務であると、民族、国家、宗教の関連性を強調した。それは神の意志への人為的介入ではなく、預言者が伝える神の意志の実行であり、ユダヤ民族の完全な救いとメシアの到来を早めるものであると説いた。

以前は正統派ユダヤ教の指導者のほとんどはシオニズムのイデオロギーと事業計画に反対していた。この新しい運動はパレスチナへのユダヤ人入植ばかりでなく、ユダヤ民族の世俗化、そしてヨーロッパの伝統的正統派ユダヤ教へのアンチテーゼとして「新ユダヤ人」（異教徒）の創造を望んだ。一方、ヨーロッパ・ユダヤ人は反ユダヤ主義の嵐の故にヨーロッパに住むことが困難と

なつて、ヨーロッパ大陸以外の地でヨーロッパ人として生活するしか道がなくなり、パレスチナへ移住してシオニズムと結びつく人々が増えてきた。シオニズムの方も、当時の多くの運動と同じように、民族主義の観点から自らを再定義するようになった——ただ、この民族主義運動への転換は、新しい郷土を選んだという点で、他の民族主義運動と根本的に異なっていた。シオニストは正統派ユダヤ教徒を軽蔑・嘲笑し、彼らをパレスチナで厳しい労働を通じて救われるべき存在と見做した。このユダヤ人のシオニスト的変革については、ヘルツルの未来ユートピア小説『古くて新しい国』(Altneuland)で美しく描かれている。ユダヤ人国が設立され、やがてドイツから観光団がユダヤ人国へやってくるという未来小説である。一人の観光客が、かつてドイツで見た正統派ユダヤ教徒の物乞いとユダヤ人国で偶然再会する話で、そのユダヤ人はもう物乞いではなく、世俗派で、教育も受け、非常に裕福になり、人生に満足していたというもの。

聖書が生活の中で果たす役割は、ユダヤ教とシオニズムでは大きく異なる。シオニズム以前のユダヤ人世界では、ヨーロッパであろうとアラブであろうと、ユダヤ教育機関が聖書を政治的あるいは民族主義的意味合いを表現する特別なテキストとして教えることはなかった。ラビたちは精神世界に重点を置き、聖書に記述されている政治史的なものやイスラエルの地におけるユダヤ民族主権という考えを、副次的・周辺の話題として扱った。ラビたちが強調したのは、ユダヤ教の教えがそうであつたように、聖書に書かれているユダヤ教徒間の関係、特にユダヤ教徒と神との関係であつた。

一八八二年の「シオンの愛好者」から第一次世界大戦前夜にユダヤ人のパレスチナへの権利を支持することを英国に働きかけたシオニズム指導者まで、シオニストは頻繁に聖書を引き合ひに出した。彼らは自分たちの都合に合うように聖書の伝統的解釈を根本から変えた。たとえばシオンの愛好者は、聖書をパレスチナに誕生したユダヤ民族がカナン人の支配に抵抗した民族解放の歴史物語として読んだ。カナン人がユダヤ人をエジプトへ追放したが、やがてユダヤ人はエジプトを脱出してパレスチナへ戻り、モーゼの後継者ヨシユアの指導でパレスチナを解放したというのだ。伝統的な解釈では、国とか民族郷土よりも、アブラハムと彼の一族が唯一絶対の神を発見する民族となつたという物語である。おそらく本書の読者も、アブラハム一族が神と出会い、試練と苦難を経てエジプトへ辿り着くという物語——決して被抑圧民族の民族解放闘争物語ではない——の方に馴染みがあるであろう。しかしシオニストは聖書を民族解放史と読み、それを今日のイスラエルで正論としているのだ。

シオニズム流の聖書解釈でたいへん興味深い例の一つは、社会主義シオニズム(労働シオニズム)のものである。シオニズムと社会主義の融合は、ヘルツルの死後、種々の社会主義党派が世界シオニズム運動の実権を握り、現地パレスチナのユダヤ人コミュニティの中心勢力となつ

たことから、本格的に始まった。彼らの一人の言葉を借りると、聖書が社会主義シオニストに「パレスチナの地に対する我々の権利を証明する神話を提供」した、というのである。彼らは、ヘブライの農民、ヘブライの羊飼、ヘブライの王、そして彼らの闘いを聖書の中で読み、それをヘブライ民族誕生に関する古代黄金時代を記述するものと自己流に解釈したのだ。そのため、彼らは厄介なパロドクスを抱え込んだ。何しろユダヤ人生活の社会主義的世俗化を推進し、それをパレスチナで実現するための入植を正当化するために聖書を使うという、水と油を融合させる離れ業を使つたのだから。換言すると、神を信じないのに、神がパレスチナを約束したと説いたのである。

多くのシオニズム指導者にとって、聖書のパレスチナ記述を利用するのは目的実現の手段としてであつて、信仰がシオニズムの本質ではなかつた。このことはテオドール・ヘルツルが書いたものにはつきり表れている。英国ユダヤ人社会の新聞『ジューイッシュ・クロニクル』に書いた有名な論説（一八九六年七月一〇日）の中で、彼は、パレスチナにユダヤ人国を建設することを聖書に基づいて説明しているが、そのユダヤ人国は当時のヨーロッパの政治思想や文化思想に基づいて運営されるのが望ましいと述べている。彼は自身の後を継いだシオニストよりもはるかに非宗教的人物であつたように思われる。実際、彼はユダヤ人国建設の候補地に関しても、パレスチナだけに拘らなかつた。パレスチナがだめなら、たとえばウガンダを約束の地

シオンにしてもよいと考えたほどだ。他にも南北アメリカ大陸やアゼルバイジャンも候補地として検討した。しかし、一九〇四年のヘルツル没の後、後継者たちはユダヤ人のホームランドはパレスチナ、約束の地パレスチナはユダヤ人の神聖な権利としたので、聖書がそれまで以上に重要な手段となつた。

ポスト・ヘルツル・シオニズム運動のパレスチナへの執着は、英国やヨーロッパのキリスト教シオニズムが強化されたために、より強くなつた。聖書を研究する神学者から「聖地」を発掘調査する福音主義者考古学者まで、ユダヤ人のパレスチナ入植、つまり「ユダヤ人帰還」を神が定めた世の終わりの前触れであり、終末論信仰を証明するものと歓迎した。ユダヤ人のパレスチナ帰還を救世主の再臨と死者の蘇りの先駆けと考えたのである。このわけのわからない宗教思想のおかげで、シオニストのパレスチナ入植事業は大いに助けられた。しかし、この宗教思想の背後には昔ながらの反ユダヤ主義があつた。ユダヤ人社会をパレスチナへ移すことは宗教的ビジョンであると同時に、ユダヤ人がいないヨーロッパを実現することにもなる。ヨーロッパからユダヤ人を追い出し、ユダヤ人のパレスチナ帰還（その後ユダヤ人がキリスト教に改宗し、改宗を拒否するユダヤ人は地獄の業火に焼かれる）によってキリスト再臨という神の構想の実現が促進されるという二重の利益を意味するのだ。

それ以来、聖書はシオニストのパレスチナ植民地化を正当化する路線図となつた。歴史的に



見ても、シオニズム誕生から一九四八年のイスラエル建国まで、聖書は大いにシオニズムに奉仕した。すなわちイスラエルの国内向け及び国外向けの主要談話——つまり神がアブラハムに約束した国とイスラエルが同じ国であるという談話を証明する役割を、聖書が担ったのだ。聖書の「イスラエル」とは七〇年にローマ軍に滅ぼされ、その民がエルサレムから追放・離散させられたという国のことである。そのときエルサレムの第二神殿が破壊された。その日はユダヤ教の記念日とされ、喪に服する日とされた。現在のイスラエルでもその日は国民の服喪日とされ、レストランなどあらゆる娯楽産業施設はその前夜から休業しなければならぬ。

この聖書談話が史実であると世俗的・学問的に証明しようという試みが、いわゆる聖書考古学（これ自体が矛盾語法的概念である。そもそも聖書はいろいろな時代のいろいろな人々によって書かれた壮大な文学作品であつて、年代記とか歴史記録書ではないのだ）を援用して行われた。この談話は七〇年にユダヤ民族がパレスチナから追放され、近年シオニストが帰還するまで、パレスチナはほぼ無人の地だつたとする。しかし、シオニズム指導者はパレスチナが無人の地ではないことを知っていたし、そのため聖書の権威に頼るだけでは不十分だと思つてゐた。人が住むパレスチナに殖民するためには、先住民を追い出す、場合によつては民族浄化するなど、組織的で系統的な政策が必要であつた。その意味でも、パレスチナ奪取をキリスト教の神聖なヴィジョンの実現として描くことは、キリスト教世界をシオニズム支援へ導くうえで、

たいへん重要であつた。

既述したように他の候補地がすべて否定され、パレスチナだけがシオニズム事業の目的地となつたとき、シオニズム先駆者から運動を引き継いだ指導者たちは、シオニズム運動を現実的・実践的な世俗運動に変え、次第に社会主義的、あるいはマルクス主義的イデオロギーを注入し始めた。世俗的・社会主義的・植民地主義的ユダヤ人事業を（神の御加護を得て）聖地で成功させることが、今や目的となつた。植民地化された地の先住民はすぐに理解したが、入植者が聖書とか、マルクス主義とか、ヨーロッパ啓蒙主義を持ち込んでいろいろな理屈をこねようが、結局先住民の運命は他者によつて決められるのだ。問題は、入植者が描く未来社会の中には先住民も含まれるのか、含まれるとしたらどういう形で含まれるか、ということになる。その意味で、初期シオニズム運動の指導者や入植者が残した記録の中で先住民がどのように描かれているかは、非常に興味深い。先住アラブ人を障害物、外国人、敵と見る、偏執狂的な記録である。

最初の反アラブ的記述が書かれたのは、まだコロニーや町へ向かうユダヤ人入植移住者たちがパレスチナ人から暖かくもてなされていた時期であつた。入植者たちの不満は、初めての地で仕事や生活を維持する手段を探すことから生じた。コロニーへ行つても町へ行つても嫌なことに直面した。どこへ行つても、生きるためにはパレスチナ人労働者やパレスチナ人農民とい

つしよに働かなければならなかつたからだ。このことを通じて、いくら無知で頑固なユダヤ人入植者であつても、パレスチナがアラブ人の国であることを感じ取らざるを得なかつた。

英国統治時代のパレスチナ・ユダヤ人社会（「イシュューヴ」）の指導者で建国後初代首相となつたダヴィド・ベン・グリオンは、パレスチナ人農民と労働者を「バイト・ミフーシユ」（苦痛の感染温床）と表現した。入植者たちはパレスチナ人を「よそ者」とか「外国人」と呼んだ。「我々にとつてこの人間はロシアやポーランドの農民よりも親しみが持てない連中だ」と一人の入植者が書き、「あの連中とは何一つ共通点がない」と別の入植者が書いている。彼らは、パレスチナは無人の地だと教えられて移住してきたのだから、そもそもそこに人が住んでいることに驚いた。「ハデラ（二八八二年に建設された初期シオニスト・コロニー）にアラブ人が住んでいる家屋があるのを発見して嫌気がさした」と書いた手紙や、リシヨン・レシオン（二八八二年に作られたコロニー）をアラブ人の男や女や子どもが平然と通るのを見て愕然とした、と故郷ポーランドへ書き送つた手紙もある。

無人の地ではなく、先住民を凌駕する必要があつたので、神を味方につける——たとえ無神論者であつても——のが得策であつた。ダヴィド・ベン・グリオンと彼の親友で同僚のイツハク・ベン・ツヴィイ（ベン・グリオンといつしよにパレスチナで社会主義（労働）シオニズムを指導、後に第二代イスラエル大統領になつた）も、聖書にある神の約束をパレスチナ植民地化の正当化に使つ

た。二人の後を継いだ労働党イデオログたちも一九七〇年代中葉までその手法を続け、さらに最近のリクード党やその分派の世俗主義者も底の浅い聖書主義を振り回して同じことをしている。

聖書解釈でシオニズムを正当化する手法によつて、社会主義シオニストは連帯・平等という社会主義の普遍的価値観とパレスチナ人を駆逐する植民地主義事業とを調和させたのである。本来なら、シオニズムの目的が植民地主義なので、社会主義シオニズムの社会主義とはいつたいどんな社会主義かと問われるべきであつた。どうやら、彼らの集団的記憶では、キブツで具現化された平等な集団生活がシオニズム黄金時代と結び付いているようである。このキブツの生活様式はイスラエル建国後も長く存続し、世界の理想に燃える青年たちを惹きつけた。青年たちはキブツで純粋な共産主義を体験しようとボランティアに参加した。<sup>〔公社10〕</sup>しかし、ほとんどのキブツがパレスチナ人村を破壊して建てられたこと、村人が一九四八年に民族浄化された事実を知つたうえでキブツへ入つた者、あるいはそれを知り得る立場にあつた者は、ほとんどいなかった。シオニストは、聖書によればパレスチナ人村はもともと古代ユダヤ民族の村であつたので、それを収用するのは奪取とか占領ではなく、解放であると弁明した。「聖書考古学者」特別委員会が民族浄化後のパレスチナ村へ入り、そこが聖書時代にどういふ名前であつたか、それを「研究」して決定し、それからユダヤ民族基金の幹部がその名前の入植地建設に着手す

るのだ。<sup>17</sup>一九六七年戦争の後、当時の労働大臣で世俗的社会主义シオニストのイーガル・アロンが同じ方法、つまり聖書によれば古代ユダヤ人のものだったという理屈で、ヘブロン近くにニュータウンを建設した。

そういうことを批判するイスラエル人学者もいた。とりわけゲルシオン・シャフィールやゼエブ・シユテルン・ヘル（及び米国のザカリ・ロックマン）は、パレスチナの植民地主義的奪取が社会主義シオニズムのいわゆる黄金期を汚辱したと論じた。この歴史研究者たちが説明したように、シオニズムの社会主義は、実践としても生活様式としても、常に普遍主義的社会主义イデオロギーの条件付き限定モデルにすぎなかった。西洋左翼の様々な思想運動を特徴付けていた普遍主義的価値観と大志は、パレスチナでは早くから民族主義化・国家主義化され、シオニズム化されてしまった。だから次世代の入植者にとって社会主義シオニズムが魅力を失ったのは不思議なことではない。<sup>18</sup>

パレスチナ人から土地を奪った後でも宗教はシオニズム事業の重要な要素として機能した。帝国主義の臨終期の領土争いで、他国を押し退けてパレスチナにおけるユダヤ民族の権利を主張するうえで、宗教が大きな役割を果たすからだ。この民族的権利は先住民パレスチナ人の民族的権利を完全に無視するものだった。二十世紀で最も世俗的で社会主義的な入植事業が、神の約束という宗教的解釈を使い、最も排他的な独占権を主張するものだったのである。聖書依

存はシオニスト入植者にとって非常に役立ち、パレスチナ先住民にとって大きな犠牲を強いるものであった。優れた研究者であったマイケル・プライアー（一九四二～二〇〇四年）の最後の作品『聖書と植民地主義』（*The Bible and Colonialism*）には、パレスチナの植民地化と同じような手法が世界の各地で使われてきたことが書かれている。<sup>19</sup>

一九六七年にイスラエルが西岸地区とガザ回廊を占領してからも、同じように聖書を用いた入植地作りが続いた。聖書に登場しているという口実でヘブロンに住民から土地を奪ってニュータウンを建設したイーガル・アロンのことはすでに述べた。キルヤット・アルバと名づけられたその入植地はたちまち狂信的入植者の巣となった。彼らはアロン以上に頻繁に聖書を利用して乱暴狼藉に及んだ。都合のよい章や語句を聖書から引つ張り出して、強盗まがいのことをやるのだ。占領が長く続くのに比例してこの残虐行為はエスカレートしていった。乱暴狼藉行為を聖書に依拠した政治的合法行為として正当化するやり方はますます狂信主義を招き、恐ろしい結果を生みだす。たとえば、聖書には皆殺しの記述がある。ヨシュアによってアマレク人が皆殺しにされる箇所だ。幸いそれをパレスチナ人に対して実行しそうな狂信者は今のところ少数ではあるが、彼らはパレスチナ人だけではなく、自分たちの物差しではユダヤ的とならない人間をもアマレク人と見做す危険な少数者である。<sup>20</sup>

ユダヤ教のハググーダー・シエル・ペサハ（エジプト脱出を記念する過越祭で読まれる詩篇やお祈

りを収めた冊子)にも、神の名による皆殺しの話がある。過越祭のセーデル(儀式)——神がモーゼとイスラエル族を他人が住んでいる国へ行かせ、そこを思い通りに所有させたことを祝う儀式——が、大多数のユダヤ人にとって、絶対的に重要なものではないのは、もちろんである。それは単なる一文学作品で、戦争遂行マニュアルではない。けれども、狂信的メシア信仰の新潮流がそれを利用する可能性は十分にある。事実、一九九五年にはイツハク・ラビンが暗殺され、二〇一五年には十代のパレスチナ少年を焼き殺した事件、さらに両親と四歳の幼児を焼き殺した事件が起きている。<sup>(訳註12)</sup> 新法相アイエレット・シャケドも同じような思想の持ち主だが、これまでのところイスラエルに抵抗して殉死したパレスチナ人だけにその思想を適用しているようだ。それでも、殉死したパレスチナ人の家族について「息子の後を追わせるべきである。これこそ正しい処置であろう。邪悪な蛇を育てた家を焼却したのと同じように、親、兄弟姉妹、親族を全部消滅させるべきだ。さもないと次々と新しい蛇が誕生する」と公言した。<sup>(2)</sup> それは今のところ将来への警告というレベルにとどまっている。しかし、これまで見てきたように、一八八二年以降常に聖書が破壊と虐殺と剝奪の正当化に使われてきた歴史がある。建国初期、つまり一九四八年から一九六七年までの間は、聖書を利用する傾向がやや緩和されたがそれは主流派労働党シオニズムについて言えることであつて、シオニズム運動右翼は相変わらず聖書を利用して、パレスチナ人を人間以下の獣、ユダヤ民族にとつての永遠の敵と表現して

いた。一九六七年戦争で西岸地区とガザ回廊を占領してからは、そのシオニズム右翼であるメシア的原理主義的ユダヤ教が急成長し、国家宗教党(MAFDAL)を形成、幻想を具現的現実とする機会を得た。<sup>(訳註13)</sup> 彼らは、政府の認可・不認可に関係なく、新たな占領地の至る所に入植地を作つた。彼らはパレスチナ領の内側にいくつものユダヤ人生活空間を作り、それを拠点にして、あたかもパレスチナ全土が自らの所有地であるかのように振る舞い始めた。<sup>(訳註14)</sup>

「ポスト一九六七年入植運動で最も過激なグッシュ・エムニームは、イスラエル軍の西岸地区・ガザ回廊支配から生じる特殊な状況に便乗して、乱暴狼藉のライセンスを聖書の名において得たかのように、文字通り好き放題に暴れた。イスラエルの法律は占領地に適用されなかつた。占領地は軍政によつて統治されたが、その軍政による規制は入植者に適用されなかつた。つまり、多くの点で、入植者はイスラエルの法律からも占領地の軍政規制からも免責されたのである。彼らはヘブロンや東エルサレムのパレスチナ人居住地の真ん中に強引に移住し、パレスチナ人が栽培するオリーブの樹を根こそぎ引き抜き、畑を焼き払い、家屋を襲い、パレスチナ人を殴打するなど、乱暴の限りを尽くした。それらの行為はすべて「エレット・イスラエル」(イスラエルの地)を取り返すという神聖な使命として正当化された。

入植者たちのこの無茶苦茶な聖書メッセージの解釈が適用されたのは占領地だけではなかつた。彼らはイスラエル内のアツカ、ヤツファ、ラムラのようなユダヤ人・パレスチナ人混住市

の中に突入して、長年にわたつて辛うじて成立してきた生活様式をかき乱した。一九六七年以前のイスラエル（グリーンライン内のイスラエル）内のこれらの敏感な地域へ入植者運動が入つていくことは、ユダヤ人国家とパレスチナ系マイノリティ国民の間に緊張しながらもなんとか成り立ってきた微妙な関係を破壊、悪化させることを意味する。

シオニストが聖書の規定する聖地を求める理由の最後のものは、迫害、とりわけホロコーストの迫害を受けた、世界のユダヤ人が安心して住める安住の地の確保であつた。<sup>（註16）</sup>もしそれが本当だとしても、聖書の中の地図を利用して先住パレスチナ人を追い出すのではない方法があつたはずである。マハトマ・ガンジーやネルソン・マンデラなどかなり多くの著名人がそういう提案をした。彼らはパレスチナ人を追い出すのでなく、パレスチナ人に懇願して、先住民と共存する形で迫害されたユダヤ人のための安住地を作るべきだと提案した。しかし、シオニズム運動はそのような提案を異端として一蹴した。

ユダヤ人哲学者マルティン・ブーバー<sup>（註17）</sup>が、シオニズム事業を支援してほしいとマハトマ・ガンジーに頼んだとき、ガンジーは、先住民と共存する形の入植と先住民を駆逐する形の入植とは大きな違いがある、と言つた。一九三八年にブーバーはベン・グリオンから、世界で倫理的に著名な人物からシオニズム支援の言葉を取りつけてほしいと依頼されたのである。とりわけ反帝国主義非暴力民族解放運動の指導者ガンジーからの支持が有益だと考えたベン・グリオンは、ガンジーがブーバーに敬意を抱いていることに着目して、ブーバーに依頼したのであつた。ガンジーのパレスチナとユダヤ人問題に関する重要な見解は、一九三八年一月一日の『ハリジャン』に社説として掲載された。彼の『ハリジャン』社説は人気があり、広く読まれていた。ちょうどパレスチナ人が英国の親シオニズム政策に抗議して反乱を起こしている時期であつた。社説の書き出しには、何世紀にもわたつて非人間的扱いを受け迫害されてきたユダヤ民族に対する心からの同情が表明されていた。しかし、彼は次のように付言した。

同情によつて正義を曇らせることはできない。ユダヤ人の民族郷土を求める声は私の心に訴えるものがない。彼らは聖書と、執拗なパレスチナ帰還という民族的願望により他者の土地での民族郷土設立を正当化する。しかし、自分が生まれ暮らしている国を自分の郷土とする民族はいくらでもいる。なぜ彼らも同じようにしないのか？<sup>（註18）</sup>

このようにガンジーは政治的シオニズムの基本論理を疑問視し、「聖書のパレスチナは現実のパレスチナではない」ことを指摘して、約束の地にユダヤ人国を樹立するという思想を否定した。つまり、シオニズム事業の政治的理由と宗教的理由の両方を否定したのである。そうえ、英国政府がシオニズム事業を支援していることが、ガンジーの心をいつそうシオニズムか

ら遠ざけた。彼はパレスチナが誰のものを明確に認識していた。

英国が英国人のものであり、フランスがフランス人のものであるのと同じように、パレスチナはアラブ人のものである。アラブ人をパレスチナから追い出しユダヤ人を送り込むうとするのは間違っており、人道に反することである……パレスチナを全面的または部分的にユダヤ人ホームにするために誇り高いアラブ人を抑圧するのは、明らかに人道に反する犯罪である。<sup>(2)</sup>

ガンジーのパレスチナ問題への対応には、倫理面から政治的リアリズムまで含めて幾層もの意味が込められていた。興味深いのは、彼自身が宗教と政治の不可分性を固く信じていたにもかかわらず、シオニズムの文化的・宗教的民族主義を一貫して厳しく批判したことだ。彼は民族国家樹立を宗教で正当化することにまったく共感を示さなかった。ブーバーはガンジーの意見に対してシオニズムを正当化する立論で対応したが、ガンジーはもうそういう議論にはうんざりしており、やがて両者間の文通は途絶えていった。

シオニズムは迫害されるユダヤ人の救済を主張しているが、現実面から見ても、彼らの立場は、可能な限り先住民を減らして可能な限り多くのパレスチナの地を獲得する欲望と規定できた。

幻想に酔っていない世俗派ユダヤ人学者も、古代の曖昧な神の約束を現代の現実 に即して翻訳するという「科学的」努力を行っていた。こういう試みはすでに英国委任統治下のユダヤ人コミュニティの歴史家ベン・ハツィオン・デイナブルグ（デイヌール）が着手していて、一九四八年の建国以降は多くの歴史家がそれを受け継ぎ、集中的に行われた。その最終的な産物は、第一章で紹介したイスラエル外務省のウェブサイトからの引用文に表現されている。一九三〇年代にデイヌールが行っていたことは、彼の後継者と同じく、ローマ時代以後のパレスチナにユダヤ人が住んでいたことを科学的に証明することであった。

そんなことはわかりきったことで、誰も疑うものはいなかった。それどころか、十八世紀のパレスチナに住んでいたユダヤ人は、十九世紀後半の正統派ユダヤ教徒と同じく、ユダヤ人国という発想に対して否定的だった。そういう歴史的事実は、二十世紀にはばつきり切り捨てられた。デイヌールとその同僚たちは、十八世紀のパレスチナのユダヤ人人口は二%だったという統計を用いて、聖書に記述されている神の約束と近代シオニストのパレスチナ獲得という要求の妥当性を「証明」したのである。<sup>(2)</sup>これが標準的歴史として受容されるようになった。英国の著名な歴史学教授の一人であるマーティン・ギルバート卿が『アラブ・イスラエル紛争地』<sup>(3)</sup> (*The Atlas of the Arab-Israeli Conflict*) という本を書いた。これはケンブリッジ大学出版局から出版され、版を重ねた。<sup>(4)</sup> 紛争の歴史を聖書時代から辿り、もともとパレスチナはユダヤ王国で、

現在二〇〇〇年の離散生活を経てユダヤ人がパレスチナへ帰還しているのだと、ごく当然のように説明している。冒頭にある四つの地図がすべてを物語っている。第一の地図は聖書で描かれるパレスチナの地図。二番目はローマ軍支配下のパレスチナの地図。三番目は十字軍時代のパレスチナの地図。そして最後の地図は一八八二年のシオニスト入植第一波の頃のパレスチナのものである。中世から一八八二年までパレスチナが存在しなかったかのような扱いである。外国人がパレスチナへ侵入したとき——ローマ人、十字軍、シオニスト——だけ、記述に値するパレスチナが存在したのであった。

イスラエルの学校で使われる教科書も、聖書にある神の約束に基づいた権利というメッセージを生徒に伝えている。二〇一四年に教育省が全学校に配布した公式文書には、「聖書がイスラエル国の文化的基盤を提供している。我々のこの地における権利は聖書が証明している」とあった。聖書を学ぶ授業が拡大され、カリキュラムの中で重要な部分となっている——パレスチナにおけるユダヤ人の主権を正当化する古代史としての聖書の役割が重要なのだ。聖書の物語、そこから引き出せる民族的教訓、ホロコーストの学習が、一九四八年の建国の学習と融合されて、子どもたちに課せられる。この二〇一四年文書は、一九三七年にダヴィッド・ベン・グリオンが英国王立ピール委員会（ユダヤ人とパレスチナ人の紛争の激化の解決策を見出すべく英国が派遣した調査団）に対して示した「証拠」と直結するものであった。ベン・グリオンは委員たちの

鼻先で聖書を振り回して、「これこそが我々のクッサン「オスマン帝国の土地登録証書」だ。我々のパレスチナにおける権利は委任統治国の勅令から生じるのでなく、聖書から生じるのだ」と叫んだのであった。

言うまでもないが、聖書とヨーロッパでユダヤ人に起こったことと歴史の一ページとしての一九四八年戦争を一緒くたにして教えることは、歴史的に何の意味もなさない。しかし、イデオロギー的に三者はつながっており、現在あるユダヤ人国の基本的正当性として生徒に教え込むべきものなのだ。本章で考察した聖書の役割から必然的に導かれる次なる問題は、シオニズムは植民地主義運動か、ということである。

#### 註

(一) Gershon Scholem, *From Berlin to Jerusalem: Youth Memoirs*, Jerusalem: Am Oved, 1982, p. 34 (Hebrew).

(二) 以下の改革派からの引用は、彼らに批判的で親シオニズム的だが、情報としては有益な資料である  
 © Ami Isserof, "Opposition of Reform Judaism to Zionism: A History," August 12, 2005, at [zionism-israel.com](http://zionism-israel.com) 45°

- (3) Walter Laqueur, *The History of Zionism*, New York: Tauris Park Paperback, 2003, pp. 338-98.
- (4) יואב פלד וצביה יואב פלד, 'Yoav Peled, *Class and Ethnicity in the Pale: The Political Economy of Jewish Workers' Nationalism in Late Imperial Russia*, London: St. Martin's Press, 1989.
- (5) M. W. Weisgal and J. Carmichael (eds.), *Chaim Weizmann: A Biography by Several Hands*, New York: Oxford University Press, 1963.
- (6) Elie Kedourie, *Nationalism*, Oxford: Blackwell, 1993, p. 70.
- (7) Shlomo Avineri, *The Making of Modern Zionism: Intellectual Origins of the Jewish State*, New York: Basic Books, 1981, pp. 187-209.
- (8) יוסי בן-צבי, *www.jewishvirtuallibrary.org* のインタビュー記事。
- (9) Eliezer Shweid, *Homeland and the Promised Land*, Tel Aviv: Am Oved, 1979, p. 218 (Hebrew) を参照。
- (10) Micha Yosef Berdichevsky, "On Both Sides," quoted in Asaf Sagiv, "The Fathers of Zionism and the Myth of the Nations," *Tzohar*, 5 (1998), p. 93 (Hebrew).
- (11) יוסף בן-צבי, *www.jewishvirtuallibrary.org* のインタビュー記事。
- (12) יוסף בן-צבי, *www.jewishvirtuallibrary.org* のインタビュー記事。
- (13) Ingrid Hjeltn and Thomas Thompson (eds.), *History, Archaeology and the Bible, Forty Years after "Historicity"*, London and New York: Routledge, 2016.
- (14) Ilan Pappé, "Shtetl Colonialism: First and Last Impressions of Indigeneity by Colonised Colonisers," *Settler Colonial Studies*, 2:1 (2012), pp. 39-58.
- (15) Moshe Beilinson, "Rebelling Against Reality," in *The Book of the Second Alliyah*, Tel Aviv: Am Oved, 1947 (Hebrew), p. 48. 同書は第二次アリアラー(移住)ユダヤ人の日記、手紙、投稿記事などを集めたもの。
- (16) Yona Hurewitz, "From Kibush Ha-Avoda to Settlement," in *The Book of the Second Alliyah*, p. 210.
- (17) Ilan Pappé, "The Bible in the Service of Zionism," in Hjeltn and Thompson, *History, Archaeology and the Bible*, pp. 205-18.
- (18) 彼らの作品や、シオニズム研究に早くから植民地主義パラダイムを導入した議論については Uri Ram, "The Colonisation Perspective in Israeli Sociology," in Ilan Pappé (ed.), *The Israeli/Palestine Question*, London and New York: Routledge, 1999, pp. 53-77 を参照せよ。
- (19) Michael Prior, *The Bible and Colonialism: A Moral Critique*, London: Bloomsbury 1997.
- (20) יוסף בן-צבי, *www.jewishvirtuallibrary.org* のインタビュー記事。
- (21) シヤケムの公的メモスメント: 1944年7月1日に現れた文書で、各紙が報道した。
- (22) Quoted in Jonathan K. Crane, "Faltering Dialogue? Religious Rhetoric of Mohandas Gandhi and Martin Buber," *Anakati Darshan*, 3:1 (2007), pp. 34-52. 引くのは A. K. Ramakrishnan, "Mahatma Gandhi Rejected Zionism," *The Wisdom Friend*, August 15, 2001, at twf.org.
- (23) Quoted in Avner Falk, "Buber and Gandhi," *Gandhi Marg*, 7<sup>th</sup> year, October 1963, p. 2. 両人のメインテーマを語るための引く Gandhi Archives からのメモスメントがある。
- (24) Ben-Zion Dinaburg's *The People of Israel in their Land: From the Beginning of Israel to the Babylonian Exile*, in 1946.
- (25) Martin Gilbert, *The Atlas of the Arab-Israeli Conflict*, Oxford: Oxford University Press, 1993.
- (26) この文書は 1944年11月29日の公的メモスメントに載った。
- (27) Tom Segev, *One Palestine, Complete*, London: Abacus, 2001, p. 401.



〔訳註1〕十八世紀後半から十九世紀にかけて生まれた啓蒙主義の影響下に、主としてドイツの都市部ユダヤ人社会で、ユダヤ固有の文化に閉じ籠るのをやめ、ヨーロッパ文化を身につけて社会的差別から解放されようという動き。

〔訳註2〕オーストリアの新聞社のバリ特派員としてドレフュス事件取材し、大きな衝撃を受け、同化主義からシオニストに転向したと言われる。ユダヤ人差別と同時に、文豪ゾラなどの差別反対運動もあつたが、彼は差別面のみを見た。

〔訳註3〕ユダヤ教を信仰しているか、あるいは先祖がユダヤ人だつたドイツ人という意味。

〔訳註4〕モーゼの兄で、最初のユダヤ教祭司。

〔訳註5〕一九二一年ドイツ生まれの現代史研究者。エルサレムへ移住し、キブツで暮らし、ヘブライ大学で学んだが、後に英国へ移住、やがて米国の大学でヨーロッパと中東の關係史を研究、教授した。

〔訳註6〕ハシデイズム（敬虔主義）は十八世紀東欧で生まれた神秘主義的ユダヤ教であり、イスラエルでは超正統派の一部とされる。ハシデイズムではユダヤ教生活をおくる共同体は「宮廷」と呼ばれ非常にたくさんあり、ジコブ派はその一つである。

〔訳註7〕パレスチナの地のシオニストはヨーロッパで異郷生活をおくるユダヤ人を「醜く、劣等で、精神が錯乱している」（詩人レア・ゴールドバーグの言葉）と軽蔑し、自分たち労働シオニストは創造的で逞しい「新人間」だと考えた。そのため、イスラエルへ逃れてきたホロコースト生存者は長らく差別された。

〔訳註8〕ヘルツルはドイツや英国など大国との外交を通じてユダヤ郷土建設を図つたので「政治的シオニズム」と呼ばれたが、ボグロムに苦しむ東欧やロシアのシオニストは合法・非合法を問わずパレスチナ移住を行つたため、「実践的シオニズム」と呼ばれた。実践的シオニズムの主たる担い手は社会主義シオニストまたは労働シオニストだつた。彼らは政治的シオニズムと統合し「総合的シオニズム」（ハイム・ワイツマンの用語）として主流派となり、ペンハグリオンの時代へと移る。

〔訳註9〕宗教シオニズムや労働シオニズムだけでなく、一般に善玉と解釈される文化シオニズムも含まれている。実際、パレスチナ人に同情的なブーバーやアーレント、アインシュタインなどの論文を読むと、ユダヤ中心主義ではないとしても、ヨーロッパ中心主義的で、後進パレスチナ人が西洋文明化したユダヤ人と仲良くすれば幸せになれるという論法が感じ取れる。

〔訳註10〕キブツ、エルサレムのムフテイのヒットラーとの会見、ホロコーストへの同情などから、イスラエルを進歩的左翼、パレスチナを反動的右翼と解釈したヨーロッパの左翼が多かつた。

〔訳註11〕オスロー合意に調印して「和平」を進めたラビン首相が、一九九五年一月四日の平和集会で、宗教右翼「エヤル」（ユダヤ民族戦闘機関）のメンバーである青年イーガル・アミールによつて射殺された。アミールは「神の律法によれば、ユダヤ人の土地を敵に渡してしまう者は殺すべきことになつている」と公判で述べた。なお、アミールはイスラエル社会における被差別層のアラブ系ユダヤ人で、ヨーロッパ・シオニズムが産み出した深刻な矛盾の一例と言える。

〔訳註12〕他に有名な事件として、一九九四年プリム祭の日に、ヘブロン入植地キルヤット・アルバのバルーフ・ゴールドシュテインが、礼拝中のイスラム教徒二人を虐殺した「マクベラ洞窟虐殺事件」がある。

〔訳註13〕極右政党「ユダヤ人の家」（ハバイト・ハイイェフテイ）の女性党员で、二〇一五年にネタニヤフ政権に入閣。

〔訳註14〕この戦争は六日間でイスラエルが大勝利を収めた。そのことから強国意識が芽生え、安全保障問題は軍事力で克服できるという自信を背景に、大イスラエル主義が台頭した。神が六日間で天

地創造したという聖書の記述と六日間で戦争勝利したことが神秘的に結合し、宗教的シオニズムが急成長した。

〔訳註15〕後に政府はグツシュ・エムニームの不法入植地を追認した。政府も軍事目的あるいはそれ以外の目的で入植地をつくって自国民を移住させた。国際法では占領地の土地や家屋を接収してそこに自国民を移住させることは禁止されており、それを規定するジュネーブ第四議定書（一九四九）にはイスラエルも署名している。従って「占領」ではなく、「征服」「併合」の意図が最初からあったのは明らか。

〔訳註16〕シオニストの指導者はホロコーストの被害者を助けるというより、それを利用してイスラエルのユダヤ人口を増やそうとした面もある。ナチにユダヤ人を迫害してイスラエルへ移住するよう仕向けてくれと依頼した疑いもある。トム・セゲフ『七番目の百万人——イスラエル人とホロコースト』（拙訳、ミネルヴァ書房、二〇一三年）に詳しい。

〔訳註17〕一八七八〜一九六五年。アハド・ハアム、イツハク・エブシユタイン、ジクムント・フロイト、アルベルト・アインシュタイン、ハンナ・アーレント等と並ぶ文化シオニストの人物。ヘルツらのシオニズムに反対し、アラブ人との共存を主張した。日本語訳に『ひとつの土地にふたつの民——ユダヤ・アラブ問題によせて』（合田正人訳、みすず書房、二〇〇六年）、『我と汝・対話』（新装版）（田口義弘訳、みすず書房、二〇一四年）などがある。訳者の考えでは、文化シオニストには、アラブ人は先進的ユダヤ人と共存することによって後進性から脱却できるという保護者的態度があり、西洋中心的な考え方が目立つ。Adam Shatz (ed.), *Prophets Outcast* (2004) の第二章、*The Other Zionism* に収録されている文化シオニストたちの論文を参照された。

## 第四章 シオニズムは植民地主義ではない

一八八二年に最初のシオニスト入植者がパレスチナへやってきたとき、パレスチナは無人の地ではなかった。そのことを、すでにシオニスト指導者たちは知っていた。初期シオニズム団体からパレスチナへ派遣された視察団は、「花嫁は美しいが、すでに他の男と結婚している」と故郷の同僚に書き送っていた。にもかかわらず、初期入植者は地元民を見て驚いた。彼らは地元民を侵入者あるいは外国人と見做した。地元民は土地を盗んで住み着いた外国人と見做された。シオニズム運動指導者は、地元民は先住民ではなく、土地に対して何ら権利を有していないと入植者に説明した。地元民の存在は解決しなければならぬし、解決できる問題だと考えられた。

これはパレスチナ特有の問題ではなかった。シオニズムは、殖民・植民地主義 (settler colonialism) 運動であり、南北米大陸、南アフリカ、オーストラリア、ニュージーランドへのヨーロ

Ten Myths About Israel

# イスラエルに関する 十の神話

Ilan Pappé

イラン・パペ [著]

脇浜義明 [訳]

